

共同研究グループ「シビル・ベテランズ&ボランティアズ」活動状況

神戸大学大学院 フェロー会員 川谷 充郎

酒井 貞

㈱奥村組土木技術部 正会員 中山 学

フェロー会員 金山正吾

1. まえがき

今、土木界を取り巻く環境は？社会とのコミュニケーションが不足しているのではないだろうか？土木学会では、「土木技術や社会資本のあり方に関して一般社会への積極的な取り組みが不足している」との認識に到達している。20世紀後半の我が国がその発展過程で指向してきた効率化と専門分化に伴って、横断的連携が損なわれてしまっている。土木を生業としてきた技術屋が一線を引き、社会的要請に応えるために何ができるかという視点から、動き始めたグループの活動状況を報告する。

2. 研究グループ設立の背景

社会基盤を支える土木事業は、公共の利益を考慮する行政の計画と営利を目的とする企業活動によって実施されてきた。土木技術者はその行政あるいは企業の一員として社会に役立つ気概をもってその役割を果たしてきたが、遅ればせながら、わが国も成熟社会へと向かう過程において、生活者としての主体性が求められている。すなわち、土木技術者が従来の組織の枠を越えて、社会基盤整備において一社会人として責任ある行動をとるよう求められている。このような活動の連携によって、いまの土木界の抱える多くの社会的な問題の新たな展開が期待される。土木事業は組織単位に行われ、その構成員である土木技術者個人はほとんど表に出ないシステムとなっている。土木構造物が“無名碑”と言われる由縁である。その土木技術者は定年退職後、突然個人に戻ってしまう。そして、組織的なケアは皆無に近い状態となり、土木技術者として高度の能力を発揮できる場がなくなる。高い見識のもと、生活者の視点から社会基盤整備に貢献するシビル・ベテランズとして活動できるのではないだろうかという見地に立ち、CVV (Civil Veterans & Volunteers) は、主として「土木」の仕事に長年携わってきたベテランたちにより、土木に関する様々な情報発信・活動を通して社会貢献することを目的に1996年4月に構想され、徐々に組織化し活動を展開してきている。

3. 調査研究項目と活動成果

3-1.「まちづくりグループ」の活動内容

「まちづくりグループ」の今年度の活動は二つのコンペへの参加提案が中心となった。栗東新幹線新駅周辺地域についての「新都市拠点ゾーンまちづくりアイデア構想」コンペと「大阪駅北ヤード地区国際コンセプトコンペ」である。まず、参加者をメーリングリストにより募集した。双方とも、12名程度の参加メンバーとなった。自由な討議を中心にコンセプトを絞り上げていく手法をとり、徹底した議論を展開した。世の中に氾濫している紋切り型の考え方や常套句を使わない、つまり自分たちが自立的に本質的に考えようという共有認識から出発することとした。常套句的に考えを進めることによる思考停止の予防策であったと考えている。次に、討議の手法として、壁にB1サイズの模造紙を貼りつけ、自由討論から生まれてくるキーワードを逐次書き留めデジカメ記録し、メンバーにメールで配信した。また、北ヤードコンペでは、ノートパソコンに直接にその場で記録を作成し、概念群の構成、関連づけなどを行い、そのメール配信により思考のまとまりと共有化を図った。

■栗東新幹線新駅周辺の「新都市拠点ゾーンまちづくりアイデア構想」について

新幹線という広域高速交通手段の導入効果を、滋賀県のみならず関西圏、中京圏まで視野にいった観光の面からとらえ、多様で重層的な観光情報拠点の形成を提案した。さらに、地域資源を観光資源としてネットワークする仕組みをホロニックなネットワークとして提案した。開発手法については土地の利用価値を基準にした証券化の方向

Mitsuo KAWATANI, Tadashi SAKAI, Shogo KANAYAMA and Manabu NAKAYAMA

を強く打ち出した。なお、この検討のためには、延べ8回（2002年6～8月）の会議を開催した。審査結果は、残念ながら地元グループが当選というある意味で不本意な結果であった。提案書をCVVホームページに掲載した。

■「大阪駅北ヤード地区国際コンセプトコンペ」について

＜「知」の天守閣＞を中心とした「知」の拠点の提案である。現在の閉塞状況から脱出する奇策はなし、不易流行を旨として、大阪の「知」の底力に改めて着目し、復活を目指すことをコンセプトの中心に据えた。

ノーベル賞受賞者の研究拠点（「知」の天守閣）を提供し、それを刺激剤として大学、専門学校、官民の研究所等の「知」のサテライトがここに集まり交流するアゴラを形成するという考え方を提案した。淀川堤防スーパー堤防化の地盤高等を勘案しながら、地球温暖化による水面上昇を警告的にとらえた基準計画面（人工地盤高さ）の提案も行った。このコンセプト討論の最後の過程で朝日放送のテレビ取材を受け、CVVの存在とともにこのグループの活動ぶりが報道された。延べ11回開催した検討に基づく提案書をCVVホームページに掲載した。

3-2 アドバイスグループの活動内容

次の4点を軸に活動し、成果を上げると共に課題の抽出を行った。活動には CVVホームページを活用した。

1) 土木技術について何でも相談の引き受け、トラブル解決へのアドバイス

「頼りになる組織であることを世にPRする」とことと「相談内容に十分対応できる実力」を涵養できるようにするために、世の注目を集めているトラブルに対して、「CVV見解」や「CVVメンバーの個人見解」をまとめて、ホームページその他で発信する予定である。

2) 一般市民の土木事業への理解を支援

「世界水フォーラムのプレイベントのガイド役」などの活動や「CVV企画の土木見学会（「舞洲ぐるっと探訪」「神戸・布引のダムと滝を訪ねる」「御堂筋探究」「千歳橋の一括架設を観る」など）」の開催は定着してきたので、①今後は、“一般市民”の参加度合いを如何にして高めていくか、②どういう見学対象が目的からみて値打ちが大きいのか、③一般市民は、どんな見学会をいちばん希望するのか、④一般市民への広報手段の模索、⑤いちばん人集めができる企画の条件は何か という課題が残った。この土木見学会について、今後、土木学会関西支部との連携を図っていく予定である。

3) 土木技術の伝承、人材の誘起・育成

「土木技術の伝承」は非常に広義であるので、①「伝承」には、どのような“ヤリカタ”があるのか、②他所では、どのようなことが実施されているのか、③CVVの力量でどのようなことなら出来るのか、④どのようなことが有意義なのか、⑤如何に「人材の誘起・育成」を行うか（CVVでは、「土木って、カッコイイ!」をホームページに掲載するために原稿を執筆中）などが課題として残っている。また、青少年向け、総合学習への支援として、学校などへ講師を派遣している。

4) ホームページ利用についての課題

「土木」という固いイメージからか、一般からのヒット数が少なく、入りやすいページの編集が望まれる。

4. CVV総会(3月4日に実施、共同研究グループワークショップとして)

毎年1回総会を開催し、各グループの活動報告と次年度の活動方針の確認・共有を行っている。平成14年度土木学会長 岸清氏（社会と土木技術者の交流・情報の受発信の必要性を痛感されて、そのシステム化のWGを土木学会本部機構の中に立ちあげられている）は、CVV活動に眼を止められて、われわれからの要請に応じて去る3月4日に開催された平成14年度の総会に参加下さり、共に活発な議論、意見交換を行った。

5. 今後の予定

上記の2グループの活動をさらに推進するとともに、「防災グループ」も立ち上げる予定である。なお、ホームページのアドレスは <http://structure.civileng.kindai.ac.jp/cvv/> である。

(参考文献) 土木学会公式HP <http://www.jsce.or.jp/> 立ち上げサイト <http://jsce.jp/>